

## 5. 協働

### 様々なつながりで 成長する動物園

今年、つながりをテーマに開園40周年を祝っていますが、40年の歴史の中、これまで大学や企業、多くの団体や市民など様々なつながりの中で動物園は成長を続け、近年、そのつながりは、より広く、そして強さを増してきています。

動物園と企業や団体等との連携、つながりは大森山動物園の開園当初からすでにその原型がつくられて来ました。開園間もない頃から開催してきた写生大会は、子どもたちの芸術を通じた人間形成に大いに寄与してきた事業と言えますが、これには秋田市造形教育研究会の長年にわたっての献身的な指導や経済的あるいは広報活動で支援をいただいている地元放送局（秋田テレビ株式会社）、文具メーカー（株式会社ぺんてる等）などの企業支援抜きにして語ることはできません。

秋田公立美術工芸短期大学（現秋田公立美術大学）は、動物園が目指すアート化の意向を受け、アート&ハートプロジェクトとして地域対応演習の授業に取り入れ、動物園へのアプローチ道路のアート化など、若い感性で動物園のアート化に力を注いでいただきました。さらに今年の開園40周年の記念として、ロゴマークとイメージキャラクター「オモリン」の制作に取り組み、新しい大森山動物園のイメージづくりに大きく貢献してくれました。今年から秋田公立美術大学となりましたが、これからも双方の関係性構築を模索していきたいと考えています。

一方で、市民型動物園としても運営されてきた動物園の典型的な活動もあります。2002年に誕生したボランティアガイド「たいようの会」があります。毎年20～30名ほどが活動し、動物ガイドや各種イベント、エサやり体験、なかよしタイムなど献身的にサポートしてくださり、動物園活動の大きな力になっています。また「嘴を折ったニホンコウノトリ、タイサ」や「義足のキリン、たいよう」などの自作の紙芝居を披露するなど、子どもたちの心の育成にも取り組んでいます。

2003年に始まったガーデンボランティア制度には現在約30のグループが花壇づくりに汗を流してくださっています。「大森山動物園は花がきれい」と評するお客さまが多く、まさにガーデンボランティアさんの力とも言えます。



秋田公立美術工芸短大 アート&ハートプロジェクト



ボランティアガイド



大森山動物園応援会



ボランティア塗装

ガーデンボランティア

園内企業との関係性も重要です。動物園を楽しみにしているお客さまは、動物の見学だけではなく、食べたり、遊んだりという総合的なレジャー施設として捉えることが多く、園内にある遊園地「アニパ」や軽食「森のこまち」は、開園当初からあった浜田観光株式会社に代わって、それぞれ2007年から、動物園と密接な関係性を保ちながら来園者に対しレクリエーションの場を提供いただいています。動物園の運営上、重要な要素を担ってくれている大切なパートナーであり、動物園発展に力を発揮してもらっています。

このほか、民間事業所からの様々な支援も動物園の大きな支えとなっています。秋田市の塗装業者団体からはボランティア活動として毎年のように園内の老朽化した施設を塗装していただいております。多くの企業や団体からはお客さま用のベンチ寄贈や植樹など様々な形で支援をいただき、動物園とのつながりを構築しています。

さらに特別な支援として特筆したいのが、動物が食べるエサの寄贈です。果樹組合によるリンゴ、パン屋からの相当量のくずパン、果物、稲藁、ひまわりの種、胡桃など企業から個人に至るまで、年間約100万円相当の飼料支援を受けています。

つながりの中、2011年には「大森山動物園応援会」も組織されました。2009年につくられた「大森山自然動物公園整備構想」について話し合う連帯の中から産声を上げた会であり、開園40周年記念事業実行委員会の中核を担っています。

県民の思いで誕生した千秋公園の動物園は、秋田市民が受け継いだ市立の児童動物園となり、やがて大森山公園に移りました。それから40年、こうした支援が続いているということは、秋田の人々にとって動物園を大事な存在として捉えていただいている証拠でもあります。このつながりをいつまでも大事にしたいものです。

## 「コミュニケーション」のあゆみ

大森山動物園の機関誌の歴史を振り返ってみたいと思います。現在の機関誌「コミュニケーション」がスタートする以前、1978年から1986年までの9年間16号にわたり続いた大森山動物園機関誌「やまどり」（秋田県の鳥）がありました。手書きとタイプライター打ちによる「青焼き」の機関誌は、当時の動物園の技術や経済状態、歴史をよく表しています。職員と社内関係者向けとして部数も内容も規模の小さい記録誌ではありますが、動物園の記録を残そうと懸命に取り組んだ様子が見て取れます。

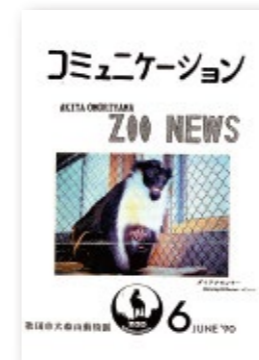
こうした背景の中、機関誌づくりには大きな抵抗もなく、本格的な記録保存と情報発信の機運が沸き起こり、1989年5月にはイラストを切り貼り、コピーなどの手作りによって「動物園だより」が誕生し、それを格上げしようと1990年、現在の「コミュニケーション」第1号が創刊されました。全国の動物園における機関誌の発行は、首都圏の大きな動物園や地方であっても大都市の有力動物園に限られている中、地方都市秋田の動物園による発行は珍しいことでした。

1992年にはカラー印刷1回が加わり、通常の手作りによる機関誌5回と合わせ年6回の発行を行い、この発行には相当の労力が費やされていました。さらに、1994年9月からは機関誌の誌面制作から印刷までの全てを業者へ発注することが可能となり、誌面の見やすさが格段と上がりました。

1998年から2007年までの表紙には当園飼育員の佐藤一男氏の動物イラストが使われ、味わいのある画風が好評となりました。2008年10月号から全ページカラー刷りとなり、内容も充実させ、年2回の発行に移行しました。近年における誌面の特徴として、2006年2月号に「大森山動物園条例」施行特集号を、2008年1月に「地方（秋田）の動物園を語る」シンポジウム特集号を、さらに2010年10月には秋田の動物園ができて60周年を記念した特集号を組みました。そして2013年発行の本誌86号は、開園40周年を記念する特集号として発行することとしました。これからも大森山動物園の「こころ（情）」を発信する大事な機関誌、そして文字として残る重要な記録誌として、継続し進化させていきたいものです。



1978年「やまどり」創刊号



1990年6月号（第1号）



1992年 No.1号



1999年 No.39号



2001年 No.55号



2008年 No.75号



2010年 No.80号



2013年 No.86号